

若い世代に科学の楽しさを伝える重要性

Importance of Passing Down Excitement of Science to the Rising Generation

福田公子 Kimiko FUKUDA

最近自然科学系研究者、技術者の女性比率を上げるために、政府がさまざまな施策を始めています。すでにいる女性研究者への対応がメインですが、女子中高校生への理系進路選択の支援も(規模は小さいもの)行われています。

最も効率の良い女子中高校生への理系進路選択支援は、日々顔を合わせる中高の教員の方々に行ってもらいたいと思います。私の所属する首都大学東京理工学研究科生命科学専攻では、東京都と近隣の高校教員にむけてさまざまな講座を開いていて、とても好評をいただいております (<http://www.se.tmu.ac.jp/biol/>の行事案内をご覧ください)。まずは理系科目の教員の方が、生き生きと生徒に教えることを支援するのが最も大事だと考えさせられます。

それと同時に、大学や研究所・企業に所属する研究者、学生が積極的に中高生とかかわることも、ロールモデルやキャリアパスを示すうえで重要だと思われま。私はひょんなことから2005年から「女子中高生夏の学校(一昨年まで女子高校生夏の学校:以下夏学<http://www.natsugaku.net>)」という行事にかかわっています。

夏学は、大学、研究所、企業などの各界で活躍する女性科学、技術者と理系女子大学(院)生が、講演、実験、ポスターなどを通して、女子中高生と交流し、女子中高生に最新の科学および、科学者、技術者としての生き方の魅力を感じてもらえるようなイベントを目指しています。

昨年度この夏学委員長として、三つのI: Initiation(とくに理系にするかどうか迷っている人むけ)、Interaction(少人数間の交流)、International(韓国理系女子高生との交流などの国際プログラム)を掲げて、夏学を企画しました。

夏学の大きな特徴として、参加者5~6人をチームに分け、3日間昼も夜も一緒に行動するので彼らは非常に仲良くなり、イベント後も互いに連絡を取り合い、彼ら自身のネットワークを作っています。また、チームには理系女子大学(院)生がチューターとして1人つ

き、メンターとしての役割を果たしています。さらに、チューターの募集・管理、学生企画の企画・運営など、企画の中心を担う学生企画委員がおります。彼らはすべてボランティアで自ら参加したいと意思表示したさまざまな大学(院)、分野の学生です。最近では夏学の卒業生の理系大学生も多く見られるようになりました。

夏学を見ていると、参加した女子中高生はもちろん大きな影響を受けているようです。とくに周りに理系進学者が少なく、イベントも少ない地方の女子学生や、自分の学校の先生の無理解な言葉に傷ついて悩んでいた学生などは、新たな仲間ができ、大学生に悩みを吐き出し、研究者との交流で新たな希望を抱いてくれているようです。

企画側にも大きな収穫があるようです。学生企画委員たちは、最初はすこし自信なさげなこともあります。最後には素晴らしいリーダーシップを発揮し、30~40人の学生をまとめあげてイベントを運営しています。さらに、ポスター発表や実験のティーチングアシスタントまたは、チューターとして参加した女子大学(院)生も自らの研究や体験を後輩に伝えることに、多くの喜びを感じていました。自分より若い世代になにかを教えるということは、いま一度自分の研究やキャリアについて見つめ直すことにも繋がると思われます。おそらく彼らは自分の進路についての決意を新たにしました。このような自主的に何か行動した体験が、これからの人生において恐らくくるであろう、さまざまな苦勞を乗り越える糧になってくれればと思っています。

私も、毎年のように今年で最後にしようと思うのですが、参加者のうれしそうな様子や、大学(院)生のひたむきな働きを見ていると、もう1年だけ参加しようと思ってしまいます。研究も大事ですが、たまには非常に若い世代にサイエンスの楽しさを伝え、そして彼らから刺激を受けるのも重要ではないでしょうか? 私にとって、これが研究のもう一つのモチベーションになりつつあります。できれば参加者が研究者になり、講師や企画委員として、夏学を運営してくれるようになるまで見守れたらいいなと思っています。



福田公子 Kimiko FUKUDA

首都大学東京理工学研究科生命科学専攻・准教授
博士(理学)

1994年東京大学大学院理学系研究科動物学専攻博士課程修了
専門は発生生物学、分子生物学
E-mail: kokko@tmu.ac.jp